

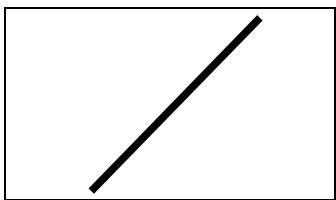
文章を音読しながら、

「あ・い・う・え・お」に印をつけて下さい。

あるひのくれがたのことである。ひとりのげにんが、  
らしようものしたであまやみをまっていた。

ひろいものしたには、このおとこのほかにだれも  
いない。ただ、ところどころにぬりのはげた、おおき  
なまるばしらに、きりぎりすがいつぴきとまっている。  
らしようもんが、すぎくおおじにあるいじようは、こ  
のおとこのほかに、あまやみをするいちめがさや  
もみえぼしが、もうにさんにはありそうなものであ  
る。それが、このおとこのほかにはだれもない。

『羅生門』 芥川龍之介

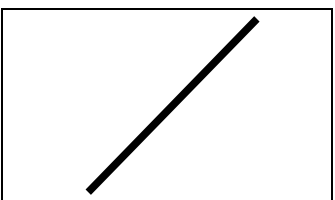


文章を音読しながら、

「あ・い・う・え・お」に印をつけて下さい。

わたくしはそのひとをつねにせんせいとよんでいた。だからここでもただせんせいとかくだけでほんみょうはうちあけない。これはせけんをはばかるえんりよというよりも、そのほうがわたくしにとってしぜんだからである。わたくしはそのひとのきおくをよびおこすごとに、すぐ「せんせい」といいたくなる。ふでをとつてもこころもちはおなじことである。よそよそしいかしらもじなどはとてもつかうきにならない。

『こころ』夏目漱石

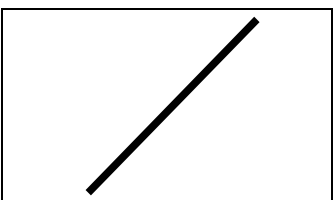


文章を音読しながら、

「あ・い・う・え・お」に印をつけて下さい。

あるひのことでございます。おしゃかさまはごくらくのはすいけのふちを、ひとりでぶらぶらおあるきになつていらっしやいました。いけのなかにさいているはすのはなは、みんなたまのようになつしろで、そのまんなかにあるきんいろのずいからは、なんともいえないういにおいが、たえまなくあたりへあふれております。ごくらくはちようどあさなのでございませう。

『蜘蛛の糸』芥川龍之介



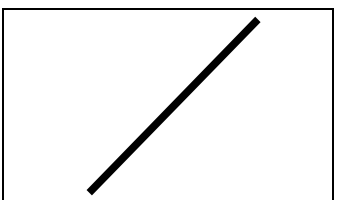
文章を音読しながら、

「か・き・く・け・こ」に印をつけて下さい。

ふたりのわかいしんしが、すっかりイギリスのへいたいのかたちをして、ぴかぴかするてっぼうをかついで、しろくまのようなぬをにひきつれて、だいぶやまおくの、このはのかさかさしたとこを、こんなことをいいながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここらのやまはけしからんね。とりもけものもいっぴきもいやがらん。なんでもかまわないからはやくタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。」

『注文の多い料理店』宮沢賢治



文章を音読しながら、

「か・き・く・け・こ」に印をつけて下さい。

えたいのしれないふきつなかたまりがわたしのこころ  
をしゅうしおさえつけていた。しようそうといおうか、  
けんおといおうか——さけをのんだあとに、ふつかよい  
があるように、さけをまいにちのんでいるとふつかよい  
にそうとうしたじきがやってくる。それがきたのだ。  
これはちよつといけなかった。

『檸檬』 梶井基次郎

